

# 仁徳紀「田道」伝承と角塚古墳

― 東北地方北半の独自性を中心とする少考 ―

女 鹿 潤 哉

はじめに

岩手県南部に造営された角塚古墳（以下、角塚にも表記する）は、最北の前方後円墳として知られ、埴輪を伴う古墳としても北限とされる。そもそも、埴輪を伴うような古墳、就中前方後円墳は、およそ三世紀後半、畿内を中心として成立した王権（以下、倭国王権などに表記する）と結び勢力を象徴するものとされ、それは倭国王権の支配、或いは影響力の拡張に伴って、我が国広域に展開していったことについては諸説一致している。

こうした前方後円墳の造営主体（以下、造営を意図した層、即ち被葬者層を意味するものとし、実際に労働力となった人々を除外して用いる）は、王権側中央から現地に派遣された地方官的人物などによる場合もあったであろう。しかし、倭国王権は、服属した地方豪族、即ち在地の王に対して君、直、首などの姓を与え、国造や県主などの地方官に任用したとされるから、新たに支配、影響下に入った在地豪族層によるものが多いと考えられる。そうした地方諸豪族の取り込みが、氏姓制倭国王権の急速な膨張を可能とした所以でもあるだろう。

前方後円墳や埴輪を伴う古墳の北東方への拡張は、およそ太平洋側が仙台・大崎平野まで、日本海側が庄内平野・山形盆地、新潟平野までがそれぞれ北限で、角塚などは例外的な存在とされる。例外とみなすにしても、角塚は確かに何者かによって造営されたのであって、その造営主体についての興味は尽きない。

未だ、主体部が発掘調査されていない現状にあって、その造営主体について論ずるのは時期尚早とする批判もあるが、内なる探求心は止み難いものがある。本小論は、身の不勉強も省みず、蛇に怖ぬ者の妄想を交えて、角塚の造営主体をめぐる問題について少考するものである。

なお、論を進めるにあたっては、東北地方北半や北部北陸地方などにあって、国史上に蝦夷・蝦夷・夷などとみえる、倭国王権や律令国家日本に対して、或いは服属・交流し、或いは抵抗したとされる在地集団の主体について、「えみし」に表記し、史書などからの引用は「蝦夷」などの表記を用いる。また、それらに対する倭国・日本側の呼称・認識についてはエミシに表記する。

## 一 角塚古墳造営の背景

角塚は、東北地方北半南域、岩手県南部、胆沢郡胆沢町大字南都田字塚田に造営されたもので、昭和五十一年に県指定史跡、同六〇年には国指定史跡となり、胆沢町ほかの所有となっている。

角塚は、地元では「塚の山」「一本杉」「蝮蛇（マムシ）塚」などと呼ばれ、「角塚」の名称は、元禄二二（一六九九）年『胆沢郡絵面』や安永『風土記御用書出』などから、江戸時代中期までには成立していたと考えられる。また、その名のおこりは、当地の「高山掃部長者物語」から、大蛇に化身した長者の妻の角を埋めた塚とする伝承に由来するものとされる。

角塚についての調査は、昭和二〇年代から田中喜多美、小岩末治、昭和三十一年の伊東信雄らによって行われているが、その後も胆沢町教育委員会によって進められ、本格的な調査は四五五年に及川洵による測量調査、四九、五〇年に林謙作ほかによる範囲確認調査、並びに研究が行われている。現在、胆沢町教育委員会による調査が継続されている。

その造営時期については、かつて五世紀末く六世紀初頭とされてきたが、出土須恵器器台、埴輪などの編年、墳丘形態などについての検討から、近年では五世紀中葉く同後葉、即ちほぼ五世紀第三四半期と考えられるようになっていく。

古代史上、東北地方北半や北部北陸地方などには「えみし」が住み、氏姓制倭国・律令国家日本に服従、交流、抵抗したとされることは周知

のとおりである。角塚が造営されたとされる五世紀第三四半期というところ、およそ中国史上に見える倭の五王の後半期、即ち国史上の允恭、安康、雄略諸天皇の治世にあたるものとみられ、この時期に前後する国史には、「蝦夷」関連記事も散見している。即ち、

応神紀三年一〇月癸酉、仁徳紀五年、雄略紀三年八月丙子、清寧紀四年八月癸丑などであり、このうち応神紀と清寧紀は造作型、仁徳紀と雄略紀は氏族伝承型とされるから、少なくとも後者については、実録性には問題もあるにはせよ、何らかの史実が反映されている可能性はあろう。

かつて本誌上などでも論じたように、後世「蝦夷」と記された該期のエミシは、東北北半や北部北陸などの在地集団の主体としての「えみし」に必ずしも限定されるものではないが、五世紀後半のエミシには「えみし」も確実に含まれていたと理解できる。このことについては、さらに後述する。すると、角塚の造営は、正に「えみし」と倭国王権、並びにそれに与する勢力（以下、倭国勢力に表記する）との、一連の緊張関係を背景としてなされたことになる。

また、倭国・日本側が把握した「えみし」の主体の居住域は、およそ新潟県北部、山形・宮城西県北半域以北から南西部北海道にわたるものであったと考えられる。倭国勢力の象徴たる前方後円墳や埴輪を伴うなどした古墳は、およそ裏日本側で新潟平野や庄内平野・山形盆地まで、表日本側で仙台・大崎平野まで、既に前期の段階で展開するも、それ以北では以後も、角塚などの例外はあれ、終に造営されることはなかったのである。

そうすると、古墳が造営された東北南半以南の地域は、概ね倭国勢力圏にあったことができる。換言すれば、こうした古墳が造営されていない東北北半と新潟県北部以北の地には、その時点では、倭国勢力側の支配、影響力は及んでいなかったと理解できそうだ。東北南半域の古墳は、確実に古墳時代前期後半にまでさかのぼるとされ、その総数も五〇基前後を数えることから、四世紀の東北南半には、広範に古墳時代社会が成立したと考えられている。すると、倭国勢力は、遅くとも四世紀末には、東北南半域をその影響下においていたことになる。

東北南半太平洋側の前期古墳は、主として北部関東經由の文化伝播の結果であるとされるが、福島県浪江町の前方後方墳、及び方墳からなる本屋敷一、二、三号墳は、周辺住居跡出土の北陸系土器などから、北陸地方からの人の移住、定着過程で成立したとされる。東北南半における北陸系や関東系土器の分布から、東北南半には、古墳出現に先立つ新しい文化の第一波が北陸地方からあり、まず内陸の会津盆地に古墳が成立し、第二波が北部関東を經由して波及し、若干の時間をおいて第二波の担い手によって、太平洋側の古墳が造営された可能性が高いとされている。

また、三世紀後半～四世紀初め、太平洋側では仙台平野から大崎平野まで、日本海側でも庄内平野・山形盆地までの地域が、東北南半南域の会津盆地などと同様、北東部北陸、東海・関東地方などからの人の移住、或いはその強い影響のもとに、弥生後期社会の構造が根本から変革されて古墳時代社会が成立したとする見解もある。それはまた、初期倭国王権の政治的な動きの中で理解すべきものとされる。

古墳時代、東北北半や新潟県北部における在地集団の主体は、古代の「えみし」に連なるものであることは、考古学、文献史上の検証から疑いなくところである。こうした古墳文化の展開状況は、「えみし」が中央による古墳文化の受容、即ち倭国王権への服属を拒絶したものと解され、「えみし」が倭国王権に抵抗したとする国史上の記述にも符合するものとなる。

角塚が位置する胆沢の地が中央の支配に服するのは、阿弓利(流)為母禮らが、延暦二一(八〇二)年四月一日、征夷大將軍坂上田村麻呂の軍門に降る桓武朝のことと考えられる。従って、胆沢の地は、平安時代初頭まで「えみし」居住域であったことになり、それを三百年以上もさかもぼる角塚造営の時点で、胆沢の地が倭国勢力側の支配、或いは影響下にあったとは考え難い。すると、角塚は、確かに「えみし」居住域の中に孤立的に存在する唯一の例ということになる。

## 二 東北地方の北半と南半

およそ東北南半南域には、国造制が施行されたことが知られるが、国造制は施行されていないものの、前期の段階から継続的に前方後円墳などが造営された地域は、既述のように、さらに北の東北南半北域にまで及んでいる。こうした東北南半域は、倭国王権の浸透度の強い地域ではあったが、王権の浸透度には強弱があったのである。

また同様に、「えみし」の居住状況についても、所謂アイヌ語地名、後述の北海道系文化要素の展開、初期律令国家による建評状況などから、

東北北半・新潟県北部以北においては、「えみし」が在地集団の主体を占めるの<sup>(2)</sup>に対して、東北南半北域では、「えみし」と倭人との雑居状況が推測されるのである。そうした見地からも、宮城・山形両県域、及び新潟県北部以北を「えみし」の地とみなす理解<sup>(3)</sup>は、妥当なものと考えられる。

一方、東北南半南域から関東地方にかけての古墳時代人骨は、渡来系とみられる北部九州など西日本弥生時代人骨と区別し得ないほどに類似しているとされる。東北地方における南北の差異は、文化面のみならず、人間の形質面にまでわたっていたことになるが、こうした差異が生じた要因は、実は前代にさかのぼるものとみられる。即ち、

青森県弘前市砂沢遺跡からは、灌漑施設などを伴う水田跡が発掘され、弥生時代前期の段階で、水稻農耕が本州北部の津軽平野にまで及んでいたことは、周知のことである。また、同じく津軽平野に位置する田舎館村垂柳遺跡からは、中期の大規模水田跡が発見されるなど、東北北半でも、少なくとも弥生時代中期までは条件のよい地域で、水稻農耕が行われていたことは疑いない。

しかし、およそ東北南半が、水稻農耕とともに磨製蛤歯石斧や石包丁、木製農具などにみるような弥生文化複合の多くを受容し、農耕社会を確立したといえるのに対して、東北北半域では、既述弥生文化に伴う遺物は、極めて稀薄といわざるを得ない。

こうした傾向は、就中その北域において顕著であり、これは、この地域には、川をさかのぼる大量の鮭や鱒、山野の豊富な動植物など漁撈・狩猟・採集対象が存在し、水稻農耕を積極的に受容する必要がなかった

ことによるものとみられる。東北北半、就中その北域においては、前代の生業伝統を継承しながら、弥生文化複合の中から多様な生業の一つとして、水稻農耕のみを選択的に受容したとする理解は正鵠を射たものであろう。

以上のことから、およそ東北南半域が、いち早く弥生農耕社会を形成し、次代古墳社会を将来する下地を確立していたのに対して、東北北半域には、終に弥生農耕社会が形成されることはなく、古墳文化を受容する基盤が未確立であったと理解できる。

近年の人骨や歯などの形態、遺伝子を用いた研究の成果には目をみはるものがある。中でも、血液など人体のタンパク質の個体間での変異（遺伝的多型）について、遺伝子の本体であるDNAを分析する方法により、今日の和人やアイヌの形成過程について、重要な指摘がなされているが、それは大筋で一つの方向性を指し示している。即ち、

縄文時代人五体（前期関東<sup>(1)</sup>、後期北海道<sup>(2)</sup>、近世アイヌ六体の人骨から抽出したミトコンドリアDNAと現代人のそれとの比較において、縄文人と近世アイヌとの極めて近い関係とともに、それらが現代日本人とはかなり異なることが指摘されている<sup>(3)</sup>。また、人間集団を遺伝子の集合体としてとらえる集団遺伝学的諸研究の総合的解釈によると、弥生時代に朝鮮半島から渡来した倭人が北九州や畿内などに進出し、やがて縄文系の原日本人を圧倒して列島の南北に拡大し、原日本人の遺伝子は、アイヌや琉球人に多く残されたと理解される<sup>(4)</sup>。

また、こうした遺伝学的研究をも含めた研究成果から、現在に至る日本人集団は縄文系と渡来系という二重構造をなし、前者は後期旧石器時

代人から縄文人へと連なるものであり、後者は弥生時代に渡来、古墳時代には統一国家形成するなど、前者を同化しつつ列島に広く居住するようになったもので、両者の混血は現在も進行中であるとする理解が提起されている。<sup>(32)</sup>これは、我が国歴史上、弥生・古墳時代に大きな画期があったことを裏付ける重要な指摘であると同時に、東北地方史の解明にも重要な意味をもつと思われる。

例えば、古代「えみし」の系統のうち、和人化しなかったものが「えぞ」へと連なり、中世北方異民族認識としてのエゾは、当初、王朝期倭因勢力が異質な北方地域を対象として用いたもので、やがて北部東北から北海道における在地集団の主体（以下、「えぞ」に表記する）への呼称となり、やがて、それが中央でも用いられるに至ったと考えられる。<sup>(33)</sup>

また、アイヌ文化は、およそ一二―一三世紀、北海道擦文文化、及び擦文文化と密接な関係にあった東北北辺を中心として成立したもので、その意味では、人間集団アイヌは「えぞ」の中から成立したと理解される。<sup>(34)</sup>

そうすると、王朝期「えぞ」の南半を構成する「えみし」の系統は、アイヌ形成に深く関与したとみられるが、「えみし」と倭人を別ける画期は、弥生・古墳時代にあったことが明白となる。それ以前、縄文時代における地域性には、結果として後世「えみし」「えぞ」、アイヌへと連なるような文化系統をたどることは可能であり、そのことは別稿によっても論じたところである。<sup>(35)</sup>それでも、縄文時代の日本は、生業や社会構造の面でほぼ一様であり、文化的にも斉一性が高いことから、門外漢の考えではあるが、隣接する地域相互の通婚関係などにより、縄文人は、遺伝子の上でも、ほぼ均質な集団だったと理解し得るであろう。

弥生時代、東南北半が農耕社会を確立し、文化面で倭人社会との差異が小さかったとすれば、倭国側からの人の移動や通婚なども自然に行われた結果、形質的差異も小さくなることは十分に考えられ、倭国勢力圏への編入も抵抗が少なかったと考えられる。後続古墳時代の時点で、東南北南半集団の主体は、文化的にも、形質的にも中央倭人と本質的な差異がなくなっていたのに対して、東北北半在地集団の主体、即ち「えみし」は、文化的にも、形質的にも縄文時代以来の性格をより濃厚に継承し、両者の差異は際立っていたものと理解できる。

また、北海道系文化諸要素の東北北半域を中心とする展開も、そのことを示唆するものの一つである。即ち、

およそ弥生時代後期後葉―古墳時代、東北北半を中心とする地域には、北海道に起源をもつ後北C―D式土器や北大I式土器などが展開し、東北北半域における北海道系土器出土遺跡はかなりの数にのぼる。その後も、それらに後続する北大II、III式土器など北海道系土器は、東北北半在地の土師器に影響を及ぼしたとみられ、七・八世紀における土器頸部などに多重沈線や段をもつものがあるが、それらは北海道系土器の要素が取り入れられたものとされる。<sup>(36)</sup>

確かに、東北地方における北海道系土器は、破片としての出土が多く、完形のものはいないのであるが、その北半域にはかなり濃厚な展開を示し、北海道系土器の影響がみられる土師器もまた、同地域に広くみられる。土器そのものが、本来移動にはなじみ難く、定着的生活とわがち難く結びつく性格を有するものとされ、<sup>(37)</sup>当時の運搬方法によって、大量に搬出入することは困難であったと考えられる。また、北海道系土器の影

響がみられるとされる土師器は、明らかに在地集団によって生産されたものである。

これらのことから、一連の北海道系土器は、一部に北海道からの移住者が直接持ち込んだものがある可能性を排除するものではないが、ほとんどは現地で生産されたものであり、在地集団が受け入れたものと理解するのが自然である。<sup>(38)</sup> 東北地方出土の北海道系土器の多くが、破片で出土するのは、現地での生産量が少なく、鉢など日常の器が主体であったことによるものと解釈できる。また、北海道系土器のうち、東北北半などに最も広範に展開した、弥生時代後期後葉・古墳時代前期の後北C<sub>2</sub>—D式土器は、東北南半や新潟県域にも点在しており、既述の見地から新潟県域での出土は、国史に見える越の「えみし」へと連なる集団に関連するものとする理解を提起したところである。<sup>(39)</sup>

一連の北海道系土器、及びその要素がみとめられる土器が出土する東北北半域の遺跡からは、既に利器として石器が鉄器へと置換して久しいにもかかわらず、黒曜石製ラウンドスクレーパーやその剥片が、土壙墓などからしばしば出土している。また、東北北半では、黒曜石製石器やその剥片の埋納、東頭位埋葬、土器埋納のための頭部側への袋状掘り込み、上屋構造物が想定される柱穴跡など、葬送面でも北海道後北C<sub>2</sub>—D式・北大Ⅲ式期を中心とする時期の文化複合に共通する諸要素がみとめられる。しかも、これら一連の北海道系文化諸要素は、単独というよりも、むしろ重層的にみとめられる傾向がみとれる。<sup>(40)</sup>

大崎平野に位置する古川市名生館遺跡からは、六世紀前半を中心とする黒曜石製ラウンドスクレーパーや剥片が大量に出土するなど、工房跡

とみられる遺構も検出されているが、同遺跡からほど近い大崎平野西部の宮崎町湯ノ倉は、黒曜石の原産地として知られ、湯ノ倉産黒曜石を原石とする石器は、岩手県雫石町仁沢瀬Ⅱ遺跡からも出土するなど、大崎平野が東北北半への交易拠点であったとする理解も提起されている。<sup>(41)</sup> この石器は、狩猟動物解体の際に、皮を剥ぐなどの用途が想定されるもので、その多くが東北北半域から出土している。

後北C<sub>2</sub>—D式、北大Ⅰ式土器、黒曜石製石器などの展開、後続の北海道系土器による在地系土師器への影響、就中、既述葬制上の諸要素の共有は、弥生・古墳時代、津軽海峡をはさむ南北が物質文化のみにとどまらず、価値観や精神文化をも共有していたことを雄弁に物語っている。<sup>(42)</sup> 既述のように、一連の北海道系文化諸要素は、東北北半在地集団の主体、即ち「えみし」が受容したものであることは疑いない。

そうすると、東北北半、及び北部北陸から道南西部にわたった「えみし」は、こうした価値観、文化を共有した集団であったと理解される。<sup>(43)</sup> 従って、「えみし」社会は、東北南半農耕社会とは、本質的に性格を異にしていたことは、もはや明らかである。

古墳時代後期・奈良時代、東北北半における住居跡、後述のように、「えみし」家父長層を葬ったとみられる所謂末期古墳などからは、土師器、鉄製農具・刀剣・甲冑類、玉類など、東北南半以南とほとんど異なるところのない遺物がみられる。確かに、東北北半在地集団の主体「えみし」の社会にも、農耕を始めとする倭国文化が受容されていることも疑いのないところであるが、既述のように、「えみし」は、道南西部にも居住し、北海道方面と価値観、文化の諸要素を共有していることは、

その性格を理解する上で、重要な意味をもっていたのである。

以上、古墳時代、奈良時代、東北北半や北部北陸などの「えみし」社会には、水稻農耕を始めとした倭国文化の諸要素を生活基盤に取り入れる地域もあったが、一方では、北海道と同様、縄文文化的性格を色濃くもっていたものと理解される。大きな抵抗もなく倭国化した東北南半以南とは、文化面でも、形質面でも際違った差異があったのである。

### 三 角塚古墳の歴史的位置づけ

角塚が「えみし」居住域の中に孤立的に造営されていることは、既に述べた。それでは、角塚の造営主体は如何なる系統に属する人々であつたろうか。可能性としては、大きく二つに分けられるであろう。その一つは在地集団の主体たる「えみし」の系統に連なる層、残る一つは倭国側から進出した豪族層ということになる。

まず、前者について検討する。その際、比較対象として想起されるのが、東北北半域にみられる所謂末期古墳である。岩手県域には、未調査のうちに破壊されたものを含めると、多数の末期古墳が造られているが、主なものは、およそ五世紀中葉、八世紀代に造営されたとみられ、東北北半地域末期古墳も、その時期に収まるものとみられる。また、その被葬者像については、北上川支流和賀川北岸に立地する五条丸古墳などにおける構造や副葬品などから、在地集団の家父長（戸主）層的性格が指摘されている。そのことはまた、北上川中流域の今泉・膳性など、当時の集落遺跡から出土する伝世品とみられる遺物類が、末期古墳出土

の副葬品と共通性をもつことから裏付けられるとされる。<sup>(17)</sup>

これらのことから、少なくとも北上川中流域の末期古墳被葬者は、「えみし」家父長層と理解されるが、国史上の記述をみる限りでは、北上川中流域、及びその支流を含む和賀・胆沢地域の「えみし」とそれ以外の地域の「えみし」とが、本質的に異なる集団だったとは考え難い。すると、東北北半域末期古墳の造営主体は、若干の地域性を考慮するに<sup>(18)</sup>はしても、ほぼ「えみし」の系統に連なるものと理解し得る。

ただ、末期古墳と埴輪を伴う前方後円墳である角塚との性格を同質とみなすことは、極めて困難といわなければならない。何故ならば、角塚の造営主体が、在地「えみし」の系統に属するものとすれば、他にも同様の古墳が存在してゐるべきである。にもかかわらず、仙台・大崎平野以北における前方後円墳、及び埴輪を伴う古墳は角塚のみであり、その被葬者を「えみし」の系統の、例えば家父長層とみなすのは極めて困難というべきである。

或いは、それを「えみし」の系統に連なるもので、倭国王権の影響下、仙台・大崎平野における勢力と結ぶ在地首長と考える余地も残る。しかし、時代のくだる平安時代前期、国史上に見る阿弭流為や母禮、伊加古などの「えみし」指導者や「えみし」社会のあり方からは、当時の「えみし」社会は、卓越した首長制社会というよりも、むしろ軍事指導者的性格を有する人物が指導する、高度に発達した部族制社会とみなす理解が実体に近いように思われる。するとやはり、角塚が造営されたとみられる五世紀第3四半期当時、胆沢地域の「えみし」集団に、倭国側技術になる埴輪を多数配し、小規模ではあれ前方後円墳を造営するための労

働力を徴発し得る首長層が存在したとは考え難い。

一方、出土埴輪やその墳丘形態の特徴など、考古学上の見地から、角塚は、仙台平野や大崎平野を中心とする宮城県北部地域との深い関連が指摘されている<sup>(2)</sup>。また、角塚の造営主体についても、仙台・大崎平野方面にあつた地域国家を宗主とする勢力、或いは、仙台平野から宮城県北部にかけての地域の首長層と密接なつながりを持ち、恒常的であるか否かは別として、全国的政治秩序の一端につながるものとする理解も提起されている。

以上のことから、角塚の造営主体は、「えみし」の系統に連なるものではなくして、東北南半以南の倭国勢力側から進出した倭人系豪族層である可能性が高い。

また、角塚は、胆沢川が北上川本流に合流する胆沢扇状地の扇端部に立地するが、その北方に立地する西大畑・面塚・中半入などの集落遺跡群が角塚造営に深く関わったとする指摘もなされている<sup>(3)</sup>。中でも、中半入遺跡からは、最古段階の須恵器甕、さらに、これに次ぐ時期の坏などが出土しており、さらに、五世紀後半とされる集落と同時期の、上幅3m、深さ一・五mほどの方形の濠状遺構が検出されており、四角く閉じる「方形区画」を構成する可能性が高いとされる<sup>(4)</sup>。

そして、こうした方形の濠をもつ区画について、宮城県以南、関東地方や西日本にみられる豪族居館との類似に注目し、角塚被葬者のような地域一帯を支配した首長の居館とみなす見解も示されている<sup>(5)</sup>。確かに、豪族居館は、関東・近畿地方を中心に宮城県北部や大分県などでも発見されており、その周辺には、時期と集落規模にみあつた古墳がみられる

場合が少なくないと思われる<sup>(6)</sup>。

既述中半入遺跡についての検討は、今後の調査にまたねばならないが、既述のように、五世紀中葉に位置づけられる最古級の須恵器が出土していることを考えると、中半入遺跡には、倭国側と結びつきの強い集団が居住していたことは疑いない。

また、中半入遺跡など、現在知られている角塚周辺の集落遺跡群が、角塚造営に関与したか否かは措くとしても、造営にあたつては、同時期その周辺にあつた集落の労働力が徴用されたことは確実である。既述のように、角塚の造営主体は、明らかに倭国勢力側に属する層であつたと理解できる。すると、造営にかり出された多数の労働力が、在地の「えみし」によるものだったとすれば、その造営主体たる倭国勢力は、当時の胆沢扇状地に支配基盤を確立していたことになる。

しかし、既述のように、五世紀代の倭国勢力が、同地域における「えみし」を支配下においていたとは考え難い。すると、角塚造営の労働力も、「えみし」ではなく、造営主体側が倭国勢力圏から移住させるなどした人々であつたと考えるのが自然ではあるまいか。

以上、角塚造営の時期、東北北半域の「えみし」社会には、多数の埴輪を配する前方後円墳を造営し得る首長は存在しておらず、角塚の造営主体は、仙台平野や、大崎平野など宮城県北部との関連が深い、倭国勢力側に属する豪族層であつた可能性が頗る高い。また、角塚造営の労働力についても、倭人系集団であつたとする理解を提起しておく。



#### 四 上毛野君田道の墓と角塚古墳

既述のように、角塚の造営主体は、倭国勢力側豪族層と理解されるが、角塚の遺構や遺物類は、このことについてこれ以上のことを語ってはいくれないようだ。そこで、考古学以外の方法、即ち文献史学の援用によって考えてみることにする。

既述のように、前方後円墳は、おしなべて倭国勢力圏に造営されており、東北北半域には、後世国史上の記載などから、その造営時点では、倭国勢力の支配、ないしは強い影響が及んでいたとは考え難い。するとやはり、角塚は、「えみし」居住域に孤立した形で造営されたことになる。古墳は、たとえ被葬者の生前に造られ、権威の象徴としての意味をも有するものであるにせよ、個人の墓として造営されたものである。こうした角塚のあり方から、筆者が、まず想起するのは、仁徳紀に見える「上毛野君田道」(伝承(五五年))である。即ち、

「蝦夷叛く。「上毛野君」田道を遣して撃たしむ。則ち、蝦夷のために敗るる所と為る。以て、伊寺水門に死す。従者有り。田道の手纏を取り得て、其の妻に與ふ。乃ち、手纏を抱きて縊死す。時の人聞きて流涕す。是の後、蝦夷亦、襲ひて人民を略む。因て、以て田道が墓を掘る。即ち、大蛇有り。瞋目を発して墓より出でて咋ふ。以て蝦夷悉く蛇に毒されて多く死亡す。唯だ、一、二人免るるを得るのみ。故に、時の人云ふ、田道既に亡すといへども遂に讎を報ず。何ぞ死人の知無からんや、と。」<sup>(27)</sup>  
要点のみを述べると、「上毛野君田道」は「蝦夷」との戦いに敗れ、

「伊寺水門」で戦死した。その後、再び「蝦夷」が蜂起して「田道」の墓を暴いたところ、大蛇が現れて「蝦夷」に喰らいかかり、その毒氣によつてほとんどが死亡した、というものである。角塚が、地元では「蝮蛇塚」などと呼ばれていることは、既に述べたが、この「田道」(伝承との類似、並びに上毛野氏の動向については、既に『胆沢町史』に若干の指摘がみられる。<sup>(28)</sup>

仁徳天皇の実在性については、大方疑いがないものとみられるが、後述のように、仁徳紀には史実をもとにした造作もみられ、既述のように、仁徳紀「田道」(伝承は、氏族伝承型に分類せられている。国史「蝦夷」関連記事が実録的となるのは、崇峻紀頃からとされ、斉明紀の頃を大きな画期として、天武・持統紀以降は、おしなべて史実に基づくものとなるとされる。<sup>(29)</sup>従つて、「田道」(伝承は、そのすべてを史実に基づくものとすることはできないが、上毛野氏の氏族伝承であった可能性は高く、作為の中にも何らかの史実が潜んでいると考えられる。<sup>(30)</sup>

以下、「田道」(伝承に潜む史実に迫るべく、憶測の域を出ない妄想を交えながら論ずることをお許しいただきたい。即ち、

「田道」(伝承は、「田道」が「蝦夷」を討伐するために派遣され、「伊寺水門」に敗死したことになるから、その墓が「蝦夷」によつて暴かれるからには、墓は「蝦夷」居住域にあったとする伝承に基づいて成立したものと考えられる。

しかし、この部分は、史実に基づく伝承というよりも、むしろ造作によるものであった可能性が強い。何故ならば、「従者」が「田道」の妻に渡し得たのは、わずかに「手纏」のみであったから、敗死した「田

道」の遺体は、敵地である「伊寺水門」付近に葬られたことになり、配下の者が簡便に埋葬したということになる。すると、「蝦夷」に暴かれるほどの墓が造られたとするのは、伝承にはしても不自然なものとなる。或いはまた、「伊寺水門」が、倭国勢力側支配下にあつて、そこにまで「蝦夷」が攻め込んだということであれば、やがて「蝦夷」は撤退したであろうから、然るべき墓を造営したとするのは当然だが、それならば、配下の者が「田道」の妻に渡したのが「手纏」だけだったとする記述は、やはり不自然なものとなる。

仁徳紀「田道」伝承は、「田道」が君姓を有する上毛野氏の一族とされ、後述のように、上毛野氏は「えみし」経略を伝統的職掌とする氏族であつたとされることを考えると、それが上毛野氏族伝承であつたことは疑いがない。すると、「田道」伝承は、やはり「田道」が敗死し、葬られたとされる「伊寺水門」が、敵地である「蝦夷」居住域にあつたという認識に立っていることは明らかである。

それでは、「伊寺水門」とは何辺を指すものであろうか。その音からは、伊治城や伊治村が想起される。すると、その位置は、一応、現在の宮城県北部栗原郡、或いはその周辺で、「水門」という表記から、一応は北上川本・支流域にあたる地域が比定し得るものと考えられる。『日本書紀』がなつた養老年間、その編纂にあつた者には、少なくともそのように認識されていたはずである。

大崎平野に位置する栗原郡域には、古墳時代前期以降、前方後円墳や埴輪を伴う古墳が造営されており、既述のように、角塚との関連が指摘される地域にあつている。確かに、伊治公弼麻呂の蜂起などの性格を

考えると、宮城県北部地域には、奈良時代に至るも、「えみし」系住民が多く住んでいたことは明らかであるが、既述のように、古墳時代前期の時点で、古墳を造営し得る首長層が存在していたこともまた明白である。

既述のように、一連の「田道」伝承は、その核心部分が倭国勢力圏外で起こつたという認識に立っている。すると、「田道」が葬られた「伊寺水門」付近が、今日の栗原郡域にあたるとすれば、「田道」が「蝦夷」居住域内に孤立して葬られたとする認識との間には、齟齬を生ずることとなる。こうした「田道」の墓のあり方が、「えみし」居住域に孤立的に造営された角塚と重なり合うように思えてならない。「田道」伝承は、上毛野君家氏族伝承の中にあつたもので、「伊寺水門」付近に葬られるなどといった造作を以て構成されてはいるものの、そこには何らかの史実が反映されているものと考えたい。

上毛野氏について、国史は、父崇神天皇から東国を治めることを命ぜられた豊城命が上毛野君、下毛野君の祖となつたことを伝える（崇神紀四八年夏四月戊申）が、上毛野氏の祖は、後年仁徳紀にみえる「竹葉瀬」としている（仁徳紀五三年夏五月）から、国史には上毛野、下毛野氏の分化は仁徳朝とする認識がみられる。

また、安閑紀には、武蔵国造の地位をめぐる笠原直使主と同族小杵との争いに際して、小杵が上毛野君小熊に援助を求めたことが記されている（元年閏一二月是月）。これは、後世の上野国域を基盤とする上毛野氏の勢力が、五世紀後半～六世紀前半、武蔵にも及んでいたことを背景とするものと考えられ、六世紀に入ると、自立的傾向の強かつた上毛野

氏勢力圏に子代や御名代が置かれるなど、上毛野氏は、この事件を契機として倭国王権に屈服し、国造に組織されるに至った可能性が強いとされる。<sup>(5)</sup>

上毛野氏はまた、『日本書紀』などには、東国の経営と「蝦夷」経略などに従事した氏族として描かれ、くだって奈良時代においても、陸奥・出羽の国司や同按察使に任ぜられる者が散見するなど、「蝦夷経営」を伝統的職掌としたとされる。<sup>(6)</sup>すると、上毛野氏は、倭国王権のもとで、北東方における未支配民経略の先兵としての役割を担ったことになる。

一方、「田道」は、朝鮮半島新羅との交渉に派遣されるなどした上毛野君の祖「竹葉瀬」の弟とされ、「田道」自身も、「蝦夷」との戦いで敗死する三年前には、新羅との戦いに勝利した武人としても描かれている（仁徳紀五年夏五月）。仁徳天皇は、中国南朝に朝貢した所謂倭の五王の最初の大王である讃とする見解もみられるなど、その治世は、およそ五世紀前半の中に位置づけられる。<sup>(7)</sup>その朝貢の背景には、高句麗などに対して朝鮮半島での倭国王権の政治的立場を強化する意図があったとみられる。

そうすると、仁徳紀「田道」伝承成立の時代背景は、角塚が造営されたとされる五世紀第三四半期をややさかのぼる時期ということになる。

一方、仁徳紀では、「竹葉瀬」が上毛野君の祖とされるから、同氏が成立するのは、この「竹葉瀬」の代、即ち仁徳朝のことだったとする認識がみられる。既述のように、子代や御名代の設置からみた、上毛野氏屈服の年代は六世紀に入ってからとされ、国史に従えば、安閑朝ということになり、その治世は六世紀前半に比定される。すると、それは仁徳

朝を一世紀程もくだる時期ということになる。

「田道」伝承成立の時代背景が仁徳朝にあったとすれば、上毛野氏が倭国王権に屈服する六世紀前半から一世紀程さかのぼる時点で、既に同氏の「えみし」経略は行われていたことになる。伝承のすべてが史実を伝えるものとは考えられないが、少なくとも記紀成立時点で、上毛野氏には北東方進出の過程で、仁徳朝に「えみし」経略があったとする家伝が存在したことを意味するものであろう。すると、上毛野氏の東北半南域への進出の動きは、五世紀前半にさかのぼる可能性も生ずる。

また、上毛野氏の東北北半南域への進出が、五世紀前半、或いはそれ以前に始まっていたとすれば、角塚造営に至る下地は、その造営以前に用意されていたことになる。既述のように、東北南半域における前期古墳時代社会成立の背景には、関東地方などからの人の移動も含めた強い影響が指摘されている。そうした動きが中期以降も継続し、そうした勢力の中に上毛野氏に連なる氏族があったとすれば、上毛野氏族の東北南半北域での基盤確立、さらに胆沢扇状地への進出は、五世紀前半の時点で始まっていたことになる。

また、時代はくだるが、官衙遺跡である仙台平野の郡山遺跡が七世紀中葉に、大崎平野の名生館遺跡が七世紀末にさかのぼるものであり、仙台平野と大崎平野における七世紀代／八世紀前半の集落遺跡からは、関東地方の土器の特徴をもつ土師器が多数発見されており、大崎平野地域の郡名や郷名には、東北南半南域や関東地方の国・郡名をそのまま用いたものがあるなど、関東地方などからの人の移動が裏付けられるとされる。<sup>(8)</sup>これらは、律令国家の支配が官衙とともに、柵戸の設置とも深く結

びついていたことを裏付けるものである。

陸奥国「えみし」居住域への柵戸の設置は、国史上、奈良時代初めの元明朝を初見とする(『続日本紀』靈龜元「七一五」年五月三〇日)が、既述考古学上の所見等から関東地方などからの植民が、これ以前にまでさかのぼることは明らかである。国史は、律令国家による組織的、かつ大規模に行われた植民について記しているのであって、小規模、或いは豪族単位のもものは、実は律令以前にさかのぼるものと考えられる。角塚が造営された時期、倭国王権側の記録には残っていないものの、関東地方有力氏族の一部が仙台平野、或いは大崎平野に政治的基盤を確立し、さらにその一支流が、後世水陸万頃と謳われた胆沢扇状地に進出したというのも、あながちあり得ぬこととはいえない。

角塚造営は、一時的なものではあれ、倭国勢力の「えみし」居住域奥深くへの進出を意味するものであり、国史編纂に際して、上毛野氏側から何らかの記録の提出があっても不自然ではない。すると、「田道」伝承の中には、上毛野氏族が角塚造営にかかわった史実が反映されていると考えられぬであろうか。こうした妄想が成り立つならば、上毛野氏の「伝統的職掌」は、王権側が、そうした同氏の実績をふまえた上で任用することにより、成立したことになる。

エミシは、元来、畿内などをも含む倭国王権に服さない人々を対象としても用いられたもので、倭国において、やがて中国古典上の北東方の毛民(毛人)と結びつく中で、北東方の人々に限定されていたと考えられる。そして、エミシの対象は、倭国王権の拡張とともに、漸次北東方へと移行していく性格をもつものとなり、最終的に東北北半・北部北

陸から道南西部にわたった「えみし」に限定されるに至ったものと理解される。エミシについて、「えみし」に限定して用いる今日の歴史認識は、かくして成立したと考えられる。

従って、倭国王権側が、新たに支配下におこうとする対象の中心が、倭人系の人々を主体とする関東地方や東北南半などにあるうちは、エミシの対象は「えみし」に限定されるものとなっていない。ところが、倭国王権が支配、影響下におこうとする主対象が、東北北半域に及んだ段階、遅くとも五世紀代には、エミシの対象は「えみし」を主体とするものとなり、同時に倭国勢力は、「えみし」の異質性を強く意識するようになったと考えられる。

そうすると、北東方進出を意図する倭国勢力の主体であった上毛野氏族による、エミシに対する経略もまた、その対象が倭人系エミシから「えみし」へとといった質的な変化を伴いながら推移し、その倭国王権への屈服後、最終的には、「えみし」経営が上毛野氏の伝統的職掌とみなされるに至ったものと理解される。

また既述のように、角塚は、地元では蝮蛇塚などと呼ばれ、掘る者には祟りがあると伝えられており、口碑によれば、大蛇と化した掃部長者の妻の角を納めたことから、その名があると伝える。仁徳紀「田道」伝承も、「田道」が大蛇と化して墓を暴いた「蝦夷」に復讐したとされる。すると、既述『胆沢町史』が指摘しているように、角塚をめぐる口碑と「田道」伝承とにみられる、大蛇という共通点も、単なる偶然ではないように思えてくる。

既述のように、角塚北方の半入遺跡からは、古式須恵器とともに、

豪族居館跡ともみられる遺構が発見されている。豪族居館跡は各地で見られているが、角塚の造営主体との関連が指摘されている、宮城県北部大崎平野に立地する築館町伊治城跡遺跡などからは、前期段階のものとされる遺構が発見されている。一方、上毛野氏の勢力圏、後世の上野国を中心とする群馬県域（以下、上毛に表記する）についてみると、時期の上で、中半入遺跡や角塚造営ともほぼ重なる五世紀後半から六世紀代には、三ツ寺Ⅰ遺跡を始めとして、規模の大小はあれ、荒砥荒子、梅ノ木、丸山、成塚住宅団地、尾島工業団地の諸遺跡が知られる。<sup>(2)</sup>すると上毛では、角塚造営併行期に多くの豪族居館が形成されていたことになる。

これら上毛の豪族居館は、豪族の住居や付属施設、祭祀の場の周に濠や溝をめぐらし、内部を柵や土塁で圍繞するものがあり、このうち三ツ寺Ⅰ遺跡は、隣接する保渡田三古墳、即ち井出二子山、保渡田八幡塚、保渡田薬師塚諸古墳とのかかわりが指摘されている。<sup>(3)</sup>すると、既述のように、古墳近隣には、その造営主体、及び被支配層が居住する集落遺跡が伴うのは、当時の一般的なあり方だったと理解できる。

さて、既述上毛野氏について、中央官人氏族としての上毛野君の成立を七世紀以降とみなし、それを三ツ寺Ⅰ遺跡を営んだ氏族の後に、台頭した勢力とする見解もある。即ち、『新撰姓氏録』左京皇別下などに見える、上毛に勢力のあつた上毛野氏の同族とされる車持公が、三ツ寺Ⅰ遺跡の地に居館を構えた保渡田三古墳の造営主体であり、その主力が大和に移った後、新たに上毛で倭国王権との結びつきを深めた氏族が上毛野君となり、やがて中央進出も果たしたというものである。<sup>(4)</sup>

この見解は、実に興味深いものがあるが、現在の筆者には、この問題について検討する知識も能力ももちあわせていないので、これまで上毛野氏（君）に表記してきた氏族について、引き続き、同じ表記とする。

さらに妄想を続けよう。即ち、

角塚の造営主体は、仙台・大崎平野にあつた倭国勢力を後ろ盾として、橋頭堡的集落を構える目的で、胆沢扇状地北部に進出した豪族層ではなかっただろうか。既述のように、東北南半における前期古墳社会成立の背景には、北陸・関東地方などからの人の移住があつたとみられ、そうしたことが、中期以降も継続していたとしても不自然ではない。すると、それは、後世律令制下における柵戸に連なるような、倭人系移民の移配を伴うもので、当時の実態から考えると、氏族の長が一族「伴」と従属民「部」とを引き連れて入植したものであろう。

また既述のように、「田道」が戦死したとする話が造作であり、「田道」が集落近くに葬られたとすれば、前方後円墳は、一般原則として前方後方墳や円墳よりも格上とされるから、上毛野氏族に連なり、君姓を冠する人物として描かれる「田道」は、前方後円墳に葬られたはずである。もちろん、「田道」が実在の人物とは思わないが、その伝承には、上毛野氏族が長期間、所謂征夷にかかわる中で生じた史実が反映されていると考えられる。

「田道」伝承は、いくらかの造作によって構成されているが、その墓は「蝦夷」居住域に孤立的にあつたとする認識がみとめられる。五世紀後半の時点で、「えみし」居住域内に孤立して造営されたと確信できる前方後円墳として、我々は角塚をあげることができる。するとやはり、

角塚こそは、伝承上の「田道」の墓としてふさわしい。角塚の立地をみても、胆沢川が北上川本流に合流する付近に形成された扇状地扇端部にあたっており、胆沢扇状地を抑え、北上川中流域における「えみし」に対する示威には、実に効果的であつたと考えられる。

そして、「田道」の死後、その後継者層が「えみし」との戦いに敗れ、集落を維持し得なかつたとすれば、「田道」の後継者とそれに与する人は「えみし」居住域内に孤立し、或いは殺害され、或いは捕らえられ、「田道」の古墳もまた、「えみし」によつて略奪を受けたであろうことは想像に難くない。「えみし」による略奪の可能性について、主体部が発掘調査されていない現状において、考古学上の所見はないようだ。

しかし、実際、養老戸令や同賦役令には、「えみし」を含む異族に囚われの身となるも、逃げ帰つた者に対する処遇についての規定があり、また国史上にも、祖先が王民でありながら、かつて「えみし」の虜となつて代を重ねてきたことを述べ、俘囚の姓を排して「調・庸の民」、即ち公民とならんことを願い出て、勅許せられた陸奥牡鹿郡の人、大伴部押人の例（『続日本紀』神護景雲二年一月二十五日）が想起される。

以上、筆者の妄想が論証の面で貧弱であることは、率直に認めざるを得ない。しかし、筆者には、「田道」伝承の中に、既述のような角塚に関する何らかの史実が潜んでいるように思えてならない。今後、中半入遺跡も含めた五く六世紀を中心とする胆沢扇状地集落遺跡の調査に注目するとともに、既述群馬・宮城県下などにおける豪族居館を含めた集落遺跡、及び周辺の古墳との関連のあり方などとの比較によつて、改めて角塚と周辺集落遺跡との関連などについて論じてみたい。

## むすびにかえて ― 角塚古墳の造営主体 ―

角塚をめぐる考古学上の所見をもとに、若干の文献史料を援用して妄想を交えながら論を展開したが、ここで要点を整理する。即ち、

近年の考古学上の成果により、角塚出土の埴輪や墳丘の形態などから、角塚が仙台平野や、大崎平野など宮城県北部の倭国勢力と密接な関連をもつと考えられ、その造営にあつては、胆沢扇状地扇端に立地する角塚北方の、集落遺跡群が深く関与した可能性が高いことが判明している。中でも、中半入遺跡からは、最古級の須恵器が出土し、豪族居館の可能性のある遺構が検出されるなど、角塚の造営主体の拠点であつたとする見解が注目される。

そして、角塚を考える上で重要な文献史料として、仁徳紀五年の「上毛野君田道」伝承について、若干の指摘を行った。即ち、

伝承上の「田道」に仮託されている人物は、前方後円墳に葬られたとみられ、それが「えみし」による略奪をうけるからには、その前方後円墳は「えみし」居住域内に、孤立的に造営されたということになる。今日、我々が知る「えみし」居住域内に、孤立的に造営された前方後円墳は、角塚を置いて他にはないのである。従つて、「田道」伝承は、倭国王権への屈服以前、上毛野氏が北東方進出の過程において、「えみし」経略に関わつた史実を反映するもので、その核心には、角塚造営前後の史実が潜んでいる可能性があることを指摘するものである。

最後に、筆者の妄想をくり返すと、次の如くなる。即ち、

角塚の造営主体は、古墳時代中期後葉以前、既に倭国勢力の政治的影響下にあった仙台・大崎平野方面の勢力を後ろ盾として、当時、倭国勢力が未だ進出していなかった「えみし」居住域の直中、北上川中流域胆沢扇状地に橋頭堡的集落を構えるべく、一族（伴）と部とを率いて入植した上毛野氏族の系統に連なる豪族層と推測するものである。

不勉強と無知に対する言い訳がましくなるが、筆者は、残念にも職務として研究が行える状況になく、専ら休日に幼子の世話などにおわれながらの執筆であった。諸賢による、温かいご批判を賜りたいものである。末筆ではあるが、いつも温かいご指導をいただいている恩師桜井清彦先生、本誌上へのご掲載にあたり、ご高配を賜った小口雅史先生に深く謝意を表して、欄筆とするものである。

## 註

- (1) 胆沢町史刊行会「古墳時代」『胆沢町史Ⅰ』原始古代編（一九八一年）、「胆沢の古代征夷開拓」『胆沢町史Ⅱ』古代中世編（一九八二年）「ともに胆沢町」。
- (2) 前掲註（1）に同じ。
- (3) 田中喜多美「胆沢郡南都田村角塚古墳」『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一二集（岩手県教育委員会、一九五〇年）。
- (4) 小岩末治「角塚古墳を語る」『奥羽史談』第二巻一号（奥羽史談会、一九五一年）。
- (5) 伊東信雄「角塚古墳」『岩手の文化財』（岩手県教育委員会、一九五六年）。
- (6) 及川洵『角塚古墳測量調査報告書』（胆沢町教育委員会、一九七〇

年）。

- (7) 林謙作ほか『角塚古墳調査報告書』（胆沢町教育委員会、一九七六年）。

- (8) 高橋信雄「角塚古墳調査研究の歩み」『角塚シンポジウム 最北の前方後円墳』（一九九八年、胆沢町・胆沢町教育委員会）。

- (9) 前掲註（7）に同じ。

- (10) 藤沢敦「東北南部の古墳と角塚古墳」『角塚シンポジウム 最北の前方後円墳』（一九九八年、胆沢町・胆沢町教育委員会）。

- (11) 坂本太郎「日本書紀と蝦夷」『蝦夷』（古代史談話会編、朝倉書店、一九五六年）。

- (12) 女鹿潤哉「用字変遷より見たる古代『えみし』についての一考察」『弘前大学國史研究』第一〇四号（一九九八年a）、女鹿潤哉「毛人・蝦蟇・蝦夷の意味と考古学」『岩手考古学』第一〇号（一九九八年b）。

- (13) 女鹿潤哉「北部東北地方におけるアイヌ語地名が意味するもの」（『金石市・大槌町におけるアイヌ語地名について』「第2部」）『岩手県立博物館研究報告』第一四号（一九九七年a）、女鹿潤哉「『えみし』と『えぞ』についての一考察」『北奥古代文化』第二六号（一九九七年b）。

- (14) 甘粕健「古墳文化の形成」『新潟県史』通史編 一原始・古代（新潟県、一九八六年）。

- (15) 川崎利夫「東北」『古墳時代の研究』第一巻（雄山閣、一九九〇年）。

- (16) 藤沢敦「東北」『古墳時代の研究』第一二巻（雄山閣、一九九〇年）。

- (17) 前掲註（16）に同じ。

- (18) 辻秀人「古墳の変遷と画期」『新版古代の日本』第九巻東北・北海道（角川書店、一九九二年）、辻秀人「蝦夷と呼ばれた社会」『古代蝦夷の世界と交流』（名著出版、一九九六年）。

(19) 甘粕健「古墳文化形成過程の新潟平野と会津盆地」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究(文部省科学研究費補助金研究成果報告書)』(『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』研究グループ、一九九三年)。

(20) 阿部朝衛・伊藤玄三「本屋敷古墳群の再検討」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究(文部省科学研究費補助金研究成果報告書)』(『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』研究グループ、一九九三年)。

(21) 前掲註(19)に同じ。

(22) 前掲註(18)一九九六年論文。

(23) 前掲註(18)一九九六年論文。

(24) 前掲註(13)一九九七年拙稿b、註(12)に同じ。

(25) 桜井清彦「考古学から見た蝦夷」『蝦夷』(社会思想社、一九七七年)、前掲註(13)一九九七年拙稿b。

(26) 前掲註(13)一九九七年拙稿b、註(12)に同じ。

(27) 今泉隆雄「古代東北の南と北」『北日本の考古学』(吉川弘文館、一九九四年)。

(28) 山口敏「古人骨にみる北部日本人の形質」『北日本の考古学』(吉川弘文館、一九九四年)。

(29) 榎田佳男「東北―水田稲作だけを受容した独自の文化」『弥生文化の成立』(金閣寺弥生文化博物館、一九九五年)。

(30) 宝来聰「遺伝子からみた日本人の起源」『日本人と日本文化の形成』(朝倉書店、一九九三年)。

(31) 尾本恵一「集団遺伝学からみた日本人」『日本人と日本文化の形成』(朝倉書店、一九九三年)。

(32) 埴原和郎「日本人集団の形成」『日本人と日本文化の形成』(朝倉書店、

一九九三年)。

(33) 前掲註(13)一九九七年拙稿b、註(12)拙稿a。

(34) 女鹿潤哉「『えみし』『えぞ』、アイヌをどう理解すべきか」『社会科学研究』第四〇号(岩手県高等学校教育研究会地歴・公民部会、一九九九年a)、女鹿潤哉「『えみし』『えぞ』の系統とアイヌ」『岩手考古学』第一一号(一九九九年b)。

(35) 前掲註(13)一九九七年拙稿b、註(34)に同じ。

(36) 高橋信雄「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器との対比」『北奥古代文化』第一三三号(一九八二年)、光井文行「七・八世紀にみられる沈線文をもつ土器について」『財』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要VII(一九八七年)、光井文行「岩手県にみられる古代の北海道系土器について」『財』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要X(一九九〇年)。

(37) A. Testart, *Les chasseurs-cueilleurs ou l'origine des inégalités* (パリ、一九八二年)「山内昶訳『新不平等起源論』(法政大学出版局、一九九五)年」。

(38) 前掲註(13)一九九七年拙稿b、註(12)に同じ。

(39) 前掲註(34)一九九九年拙稿b。

(40) 前掲註(13)一九九七年拙稿b。

(41) 高橋誠明「角塚古墳前夜の大崎平野」『角塚シンポジウム 最北の前方後円墳』(一九九八年、胆沢町・胆沢町教育委員会)。

(42) 前掲註(13)一九九七年拙稿b、註(12)に同じ。

(43) 前掲註(13)一九九七年拙稿b、註(12)に同じ。

(44) 大塚他『日本古墳大辞典』(東京堂出版、一九八九年)によれば、岩手県内の末期古墳について、岩手町浮島古墳群を五世紀中葉く六世紀代に、西根町谷助平・矢巾町藤沢狄森・花巻市熊堂・北上市江釣子・金ヶ



崎町西根諸古墳群を七ヶ八世紀代に位置づけている。浮島古墳群については、他の諸例との比較において、ややあげすぎの懸念がなくはないが、その他の末期古墳群については、ほぼ七ヶ八世紀を中心とする年代が想定されていることから、ほぼこの時期に収まるものと考えられる。

- (45) 沼山源喜治「陸奥北半における末期古墳群の性格」『北奥古代文化』第八号（一九七六年）。

- (46) 林謙作『五条丸古墳群』の被葬者たち』『考古学研究』第二五卷第三号（一九七八年）。

- (47) 相原康二「古代の集落と生活―蝦夷の集落」、並びに「コラム三 伝製品の遺物類」『新版古代の日本』第九巻東北・北海道（角川書店、一九九二年）。

- (48) 前掲註（12）拙稿a。

- (49) 工藤雅樹「古代蝦夷とその社会」『北からの日本史』（三省堂、一九八八年）、工藤雅樹「蝦夷社会の構造」『古代の蝦夷』（河出書房新社、一九九二年）。

- (50) 前掲註（7）、（10）、白石太一郎「日本前方後円墳の中での角塚古墳」『角塚シンポジウム 最北の前方後円墳』（一九九八年、胆沢町・胆沢町教育委員会）。

- (51) 前掲註（7）に同じ。

- (52) 前掲註（10）に同じ。

- (53) 八木光則「角塚古墳以後の北上川流域」『角塚シンポジウム 最北の前方後円墳』（一九九八年、胆沢町・胆沢町教育委員会）。

- (54) 高木晃「中半入遺跡現地説明会資料」（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、一九九九年）。

- (55) 前掲註（54）に同じ。

- (56) 小笠原好彦「豪族の居館と構造」『古代史復元六 古墳時代の王と民

衆』（講談社、一九八九年）。

- (57) 新訂増補国史大系『日本書紀』（吉川弘文館、一九八一年）に拠った。ただし、書き下しは筆者によるものである。

- (58) 前掲註（1）に同じ。

- (59) 前掲註（11）に同じ。

- (60) 例えば、初代神武天皇東征説話の中には、後世壬申の乱における大海人皇子（天武天皇）の事跡が、或いは『古事記』景行天皇条や景行紀ヤマトタケル伝承においても、前者には雄略天皇のあり方が、後者には武市皇子の事跡が、それぞれ仮託されたとする指摘がある（水野祐『日本の古代の国家形成』（講談社、一九六七年））。

- (61) 鎌田元一「大王による国土の統一」『日本の古代六 王権をめぐる戦い』（中央公論社、一九八六年）。

- (62) 志田諄一「かみつけのうじ 上毛野氏」『国史大辞典』第三巻（吉川弘文館、一九八二年）。

- (63) 黛弘道「仁徳天皇」『世界大百科事典』二三（平凡社、一九八二）。

- (64) 今泉隆雄「八世紀以前の陸奥国と坂東」『地方史研究』第二二二号（一九八九年）、小井川和夫・村田晃一「古代東北地方南部の集落と生業」『北日本の考古学』（吉川弘文館、一九九四年）。

- (65) 荒木陽一郎「東北古代史研究講座」『蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題―第四回 神武紀歌謡における『愛滿詩』の考察』『弘前大学国史研究』第九四号（一九九三年）。

- (66) 児島恭子「エミシ、エゾ、『毛人』『蝦夷』の意味」『竹内理三先生喜寿記念論文集上巻 律令制と古代社会』（竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編、東京堂出版、一九八四年）、荒木陽一郎「東北古代史研究講座」『蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題―第五回表記「毛人」「蝦夷」の起源と呼称エミシとの結びつき』『弘前大学国史研究』第九五号（一九

九三年)。

(67) 前掲註(12)に同じ。

(68) 前掲註(12)に同じ。

(69) 築館町教育委員会「伊治城跡遺跡」『築館町文化財調査報告書』第二集(一九九〇年)、同第五集(一九九二年)、同第一集(一九九八年)。

(70) 井上唯雄「群馬県における古墳時代の居館跡」『上越新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第八集〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団、一九八八年)。

(71) 前掲註(56)、前沢和之「三ツ寺I遺跡の性格と意義」『上越新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第八集〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団、一九八八年)、右島和夫「保渡田三古墳について」『上越新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第八集〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団、一九八八年)。

(72) 前掲註(71)前沢論文。

(73) 都出比呂志「古墳が造られた時代」『古代史復元六 古墳時代の王と民衆』(講談社、一九八九年)。

(74) ともに、新訂増補国史大系『令義解』(吉川弘文館、一九八一年)に拠った。

## 付記

本小論は、主として弥生時代後期後葉～古代、東北北半・北部北陸から道南西部における在地集団の主体を「えみし」に表記したが、それは古代史上の「えみし」は、倭国王権、及び倭国側エミシ認識が成立する以前、既に実体の上で成立していたとする私見によるものである。

これは、共通の価値観、文化を共有する集団「えみし」としての実体

は、北海道続縄文文化後北C<sub>2</sub>―D式期～擦文期前半、即ち本州側の弥生時代後期後葉から古代に至るまで継続しているという、一連の拙稿によって提起した理解に基づいている。

このことについてのさらなる検討、補足は、今後、別稿を用意するものとするが、ここでも確認しておく。

(めが・じゅんや 岩手県立博物館学芸員)